

個別共同研究 ポルト屏風下張り文書等の予備的研究

期間：2020 年～

〔所員〕 関口博巨 昆 政明 須崎文代 泉水英計

〔東京大学史料編纂所〕 久留島典子

プロジェクトの新展開に向けて

関口 博巨

研究の目的

本研究は、エヴォラ屏風文書（レプリカ、本学所蔵予定）ならびにポルト南蛮屏風下張り文書（ポルトガル・ポルト市、ソアレス・ドス・レイス国立博物館所蔵）に関する総合的・資料学的研究を目的としている。

エヴォラ屏風文書（レプリカ）は、20 世紀初頭にポルトガルのエヴォラで発見された屏風下張り文書であり、豊臣秀吉側近の安威氏関係文書、キリスト教布教関係の記録など、1600 年前後の史料群である。

ポルト南蛮屏風下張り文書は、京都の菓子屋「菱屋」が所蔵していた近世中期の古文書（約 2,000 枚）である。その屏風絵は狩野派の絵師が描いた 17 世紀のものと推測される作品で、近世初期の風俗資料としても価値が高い。下張り文書は、2002 年の屏風修復の際に取り外されたものである。

本研究では、これらポルトガル伝来屏風文書のデジタルデータ化と目録の整備をすすめる。将来的には、他の在外下張り文書も視野に入れて、歴史学・民具学・美術史学・キリスト教史学・情報学・建築史学・文化人類学などの学知や古文書修復などの経験知を総合した国際的・学際的な研究に発展させることを期している。



写真1 下張り文書の予備調査（2020 年 1 月）



写真2 ポルト南蛮屏風下張り文書の一部



写真3 エヴォアラ屏風文書（レプリカ）の収納箱（一部）

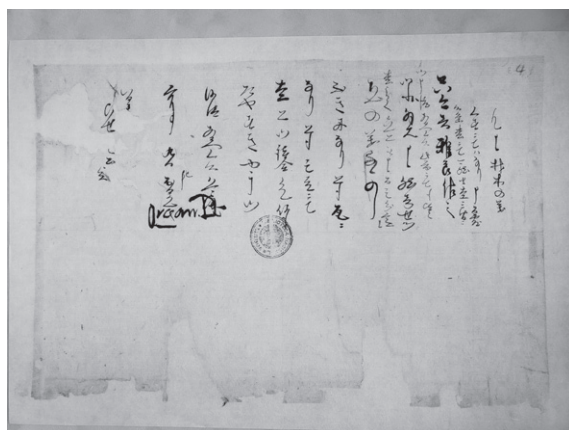


写真4 エヴォアラ屏風文書 レプリカ（1）

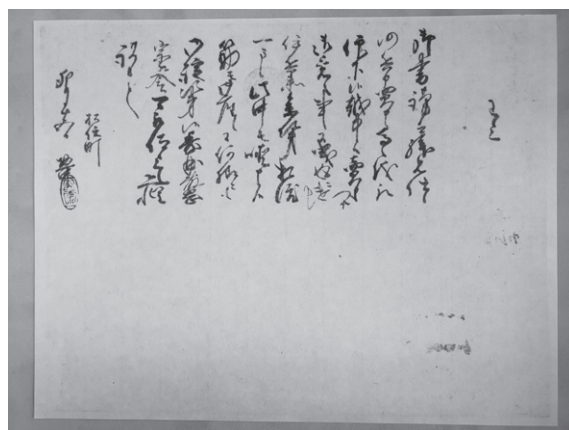


写真5 エヴォアラ屏風文書 レプリカ（2）

これまでの経過と今後の展望

2020年1月末、所員の関口博巨と泉水英計が、縁あって、ソアレス・ドス・レイス国立博物館を訪ね、修復された南蛮屏風とその下張り文書の予備調査を行った。その直後、世界はコロナ禍に翻弄され、本共同研究の活動も大幅に制限されることとなった。われわれは、コロナ禍を準備期間として、プロジェクトの新展開を試みることにした。

ポルト南蛮屏風下張り文書の研究は、「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」という研究題目で、2021～2023（令和3～5）年度の科研費挑戦的研究（開拓）を申請した。幸い、このプロジェクトは補助事業に採択されたので、2021年度以降は、常民研の所員ならびに他機関の研究者を含む新体制で進めてゆくことになる。

エヴォアラ屏風文書の研究にも新展開があった。神奈川大学では、南蛮屏風下張り文書修復実行委員会（代表：伊藤玄二郎氏）からエヴォアラ屏風文書の精巧なレプリカ（岡墨光堂製）を譲渡され、エヴォアラ屏風文書の原本を所蔵するエヴォアラ公共図書館ならびにポルトガル国立図書館と研究協力関係を結ぶことが、ほぼ確定したのである。

このような状況の展開を受けて、常民研では、2021年度より、当プロジェクトを基盤共同研究に位置付け、名称を「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」に変更することとした。

■ 2020年度の活動

- 「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」として科研費挑戦的研究（開拓）を申請
2020年10月 関口博巨